〈研究ノート〉

Secondary locative construction の諸特性とその分析案について

向　後　朋　美

1. はじめに

英語では，(1)に示した2通りの統語構造によって「カーラがビルの背中を叩いた」という事態を表すことができる。

(1)a. Carla hit Bill's back.
　　b. Carla hit Bill on/in the back.

下線部で示したように(1a)は[V-NP1's-NP2]の連鎖を含み，NP1(＝Bill)とNP2(＝back)には全体とその一部という関係(part-whole relation)が成り立っている。(1b)は[V-NP1-P-NP2]という連鎖を含み，NP1とNP2の間にも(1a)と同様に全体とその一部という関係が成り立っている。(1a)では動詞の唯一の目的語であった[NP1's NP2]の構成素であるNP1's(＝Bill's)とNP2(＝back)が，(1b)ではそれぞれ目的語のNP1(＝Bill)と前置詞の目的語のNP2(＝back)という統語構造上は独立した要素として生起している。

(1a)タイプの文は，Vとその目的語である[NP1's NP2]の間に意味的不整合がない限りは，(2)に示したようないろいろな事態を表すことができるという点で，基本的な構文であるといえる。

(2)a. The dentist examined my teeth.
b. Mirah loved his heart.
c. The lion destroyed the child's arm.
....

一方(1b)タイプの文は，(3)に示したように(2)の文によって表される事態を表すことができず，表すことのできる事態が限られているという点で，(1a)タイプの文に比べると制約が大きい。

(3)a. *The dentist examined me in the teeth.
b. *Mirah loved him in the heart.
c. *The lion destroyed the child on the arm.
(Massam 1989: 238)

もともと意味的には1つのまとまりであった要素を統語構造上は独立した2つの構成素によって表す(1b)タイプの文には，(1a)タイプの文にはみられなかったような制約や特性が他にもみられる。本稿では，(1b)タイプの文の[P-NP2]の連鎖をSecondary locative(以下，SLと省略)，SLの生起する構文をSecondary locative construction(以下，SLCと省略)と呼び，その統語的，意味的特性をどのように説明したらよいのかという問題を考察する。[1] また，(1a)タイプの文をGenitive construction(以下，GCと省略)と呼び，SLC全体としての特性をみる際に，GCとSLCとを比較しながら考察を行う。

まず第2節では，SLCの諸特性を概観する。次に第3節で，SLCに関する先行研究を概観し，第2節でみた諸特性がどのように記述・説明されることになるのかについて考察を加える。

2. SLCの諸特性

本節では，SLCに関して説明されなくてはならない特性を統語的・意味的側面と語用論的側面から考察する。まず2.1節では，SLと共起する要素

[V-NP1]，SL(＝[P-NP2])自体，[NP1-P-NP2]，という SLC の 3 つの部分に焦点をあてて，その統語的・意味的特性を順に考察する。次に 2.2 節で，SLC 全体としてどのような語用論的特性をもつことになるのかに焦点を当てて，GC と比較しながら述べる。

2.1 統語的・意味的特性

2.1.1 [V-NP1]の特性

GC とは異なり，SLC が可能であるかどうかは動詞の意味に依存することがよく知られている。(Fillmore(1967)，Massam(1989)，Pinker(1989)，Jackendoff(1990)，Tomizawa(1992)等参照。)例えば，SL は直接目的語をとる動詞すべてについて生起可能なわけではなく，(3a)-(3b)に示したように，目的語に対して物理的影響を与えないような動詞や状態を表す動詞の場合は生起できない。また，(3c)に示したように目的語に対して物理的影響を与えるような他動詞であってもそのすべてに生起可能なわけでもない。SL は，他動詞の中でも(4)に列挙したように何らかの意味で「接触」を表す動詞に限って生起可能となる。

(4) SLC に生起可能可能な動詞類[2]

A. contact verbs

a. pure contact

caress, graze, kiss, lick, nudge, pat, peck (＝kiss), pinch, prod, sting, tickle, touch

b. impact

(i) hit verbs: bang, bash, batter, beat, bump, butt, dash, drum, hammer, hit, kick, knock, lash, pound, rap, slap, smack, smash, strike, tamp, tap, thump, thwack, whack

(ii) swat verbs: bite, claw, paw, peck, punch, scratch, shoot, slug, stab, swat, swipe

(iii) spank verbs: bonk, cane, clobber, club, conk, flog, knife, pummel, sock, spank, strap, thrash, wallop, whip, whisk

(iv) poke verbs: dig, job, pierce, poke, prick, stick

c. moving contact
stroke, scratch
d. cutting[3]
chip, clip, cut, hack, hew, saw, scrape, slash, snip

B. others
a. hang (verbs of putting)
b. catch, grab, seize (verbs of obtaining)
c. pull, push (verbs of exerting force)
d. take, drag (verbs of sending and carrying)

C. look, gaze, stare (verbs of perception)

(5) a. He turned to Susan and kissed her on the cheek. (N03 14)
b. Jones then recoiled his rope and threw again, this time hitting her on the back but failing to encircle her. (F36 50)
c. Beth stroked the cat on the neck. (Jackendoff 1990: 109)
d. Carol cut herself on the thumb. (Levin 1993: 156)

(6) a. Great-uncle Algie came round for tea and he was hanging me out of an upstairs window by the ankles .... (*HPPS*: 137)
b. Harry jumped to his feet, caught Quirrel by the arm and hung on as tight as he could. (*ibid.*: 317)
c. The dog pulled him by the coat.
d. Mary dragged the chair by the legs.

(7) He looked me straight in the face.

(4A)に挙げた動詞類は，動詞の固有の意味として「接触」を表すような動詞類である。(4Aa)-(4Ad)の動詞類がそれぞれ表す基本的な意味を，「物体Xの移動」,「物体XとYの接触」,「物体Yの状態の変化」という観点から記述するとおおよそ次のように区別される。(4Aa)の動詞類は，純粋な接触(pure contact)，すなわち，「ある物体Xが物体Yの表面に接触する」という事態のみを表し，接触前のXの移動，接触後のYの状態の変化については何も含意しない。(4Ab)の動詞類は，「ある物体Xが移動をした結果，物体Yに接触する」という事態を表す。この動詞類は，Xの接触前の移動

を指定するという点で(4Aa)の動詞類とは異なっているが，接触後のYの状態の変化については含意しないという点は同様である。(4Ac)の動詞類は「ある物体Xが物体Yに接触しながら移動する」という事態を表す。接触前のXの移動と接触後のYの状態の変化については何も含意しないという点では(4Aa)の動詞類と同様であり，Yと接触しながらの物体Xの移動を含意する点のみが異なるので，(4Aa)の動詞類の下位類であるとみることもできるかもしれない。(4Ad)の動詞類は「ある物体Xが移動をした結果物体Yに接触し，その結果Yがある状態になる」という事態を表す。すなわち，接触前のXの移動，XとYの接触，接触後のYの状態の変化，の3つの事態を含意している。

(4B)に挙げた動詞類は(4A)に挙げた動詞類とは異なり，動詞自体がその固有の意味として「接触」を表すわけではない，あるいは，「接触」の意味が前面に出てこない動詞であるが，前置詞byを主要部とするPPが生起することによって，SLC全体として「接触」の意味を明確に表わせるようになる。具体的には，Levin(1993)において(4Ba)はverbs of putting，(4Bb)はverbs of obtaining，(4Bc)はverbs of exerting force，(4Bd)はverbs of sending and carryingと呼ばれる動詞類に属し，本来はそれぞれ「ある物体をある場所に置く」，「ある物体を獲得する」，「ある物体に力を加えて移動する」，「ある物体の位置や所有権を移動する」という意味を表す動詞である。これらの動詞がSLと共起した場合に，「接触」の意味がより明確に表され，(4Ba)と(4Bb)の動詞は(4Aa)の「純粋の接触」の動詞類に，(4Bb)と(4Bc)の動詞は「接触しながらの移動」の動詞類に非常に近い意味をSLC内で表わせるようになる。

(4C)に挙げた動詞類も動詞自体がその固有の意味として「接触」を表してはいない。前置詞inを主要部とするPPを含むSLCに生起した場合，SLC全体の意味として「視線」，あるいは「まなざし」が比喩的な意味でNP2に接触するということを表すと考えられる。

このように，SLCに生起可能な動詞は何らかの意味で「接触」を表しているといえる。そして，どのように「接触」の意味を表すことになるのかということに関しては，動詞が語彙項目の意味としてもともと「接触」を表すもの(＝(4A))，SLによって「接触部」を明示的に表すことで「接触」を表

せるようになるもの(=(4B)), さらに, SL が生起することにより比喩的な意味での「接触」を表せるようになるもの(=(4C)), という 3 つの段階があることがわかる。

ここまでは[V-NP1]の連鎖についてのみみてきたが, 意味的に「接触」を表しているのであれば, (8)-(9)に示したように[V-NP1]の連鎖以外の場合であっても SL と共起することは可能となる。

(8)a. Danniel gave her a kiss (on the forehead).
b. Danniel gave him a punch (in the nose). (Massam 1989: 238)
c. Everyone gave us a pat on the back. (Quirk *et al.* 1983: 270)
(8′)a. Danniel kissed her (on the forehead).
b. Danniel punched him (in the nose).
c. Everyone pat us (on the back).
(9)a. attachment: attach, adhere, stick
b. The gum stuck to Bill(ok/?? above the eyebrow). (Jackendoff 1990: 112)

(8)に示した文は, [V-NP1-NP2]の連鎖が意味的には(8′)の下線部で示した[V-NP1]と同じ意味, すなわち「接触」を表しており, SL と共起可能である。また, Jackendoff(1990)で指摘されているように, (9a)の動詞は[V-P-NP1]の連鎖に生起するが, 意味的には「接触」を表しており, SL と共起可能である。[4]

反対に, (4)に挙げた動詞が生起していても, VP の中心的な意味として「接触」を表していない場合は, SL とは共起できない。

(10)a. *Margaret cut off Bill on the arm.
a′. Margaret cut off Bill's arm.
b. *I could scratch her out on the eyes.
b′. I could scratch her eyes out. (K18 17)
c. *John kicked the mule on the back into motion.
c′. John kicked the mule's back into motion.

(10)に示したGCは，それぞれ「ビルの腕を切り落とす」，「彼女の目を引っかき出す」，「ロバの背中を蹴飛ばして歩かせる」という意味となり，XとYの「接触」よりもXがYに対して行った行為の「結果」の方に焦点が当てられている。この場合，同じ事態を表すSLCは存在しない。すなわち，(4)の動詞類が生起していても副詞的要素が付け加わり，行為の「結果」が意味的に主要な部分となっている場合は，SLCは不可能であるというとになる。

2.1.2 SL(＝[P-NP2])の特性

本節ではSL(＝[P-NP2])部分の特性について考察する。まず2.1.2.1節で，SLが統語構造上どのような位置に生起するのかという統語的特性について，次に2.1.2.2節で，SLの主要部としてどのようなPが可能であるかというPの意味的特性について，順にみていく。

2.1.2.1 SLの統語的特性

SLの統語上の位置に関しては，Urushibara(1989: 75-76)が(12)-(15)の例を挙げ，(11c)の場所を表すPPはVP(＝V″)に直接支配される位置に生起しているのに対し，SLは(11a)の動詞の補部同様，V′に直接支配される位置に生起していると主張している。

(11)a. John put the book in the box.
b. John hit Bill in the stomach.
c. John hit Bill in the room.
(12)a. *In the box John put the book.
b. *In the stomach John hit Bill.
c. In the room John hit Bill.
(13)a. John put the book {in the box in the room/ *in the room in the box}.
b. John hit Bill {in the stomach in the room/ *in the room in the stomach.
(14)a. John said he would hit Bill in the stomach, and hit Bill in the stomach he did.

b. *John said he would hit Bill in the stomach, and hit Bill he did in the stomach.

(15)a. John hit Bill in the stomach and Mike did so (*in the face).

b. John hit Bill in the room and Mike did so (in the garden).

(12)の対比が示すように，SL は動詞の補部(complement)である PP と同様に前置すると非文となるが，付加詞(adjunct)の PP は前置可能である。PP 間の線的順序に関しては，(13)が示すように，SL も補部の PP も付加詞の PP の後に生起する場合は非文となる。(14)の V′ 前置(V′ preposing)の例では，SL は V と一緒に前置されないと非文となり，(15)の do so での置き換えの例では，SL が do so に含まれない場合は非文となる。

(16)に示したように SL の生起は随意的である。しかし，Guéron(1985)，Langacker(1984)が指摘しているように，意味的には(11c)の付加詞 PP が行為の起こった場所を示しているのに対し，SL は行為そのものを完成させる役目を担っているという点で付加詞 PP とは異なった特性をもつ。

(16)a. John kissed Mary (on the cheek).

b. Mary hit Bill (on the back).

c. Beth stroked the cat (on the neck).

d. Carol cut herself (on the thumb).

例えば，(17a)において「噛む」という行為に実際直接に関わるのは，主語である your dog の指示物と目的語である my cat の指示物の全体ではなく，それぞれの一部分であるが，それがどの部分であるのかは明示されていない。[5] 行為に直接かかわる部分を統語上明示的に表わす前置詞句である[with its sharp teeth]と[on the tail]が生起した文が(17b)である。

(17)a. Your dog bit my cat.

b. Your dog bit my cat on the tail with its sharp teeth.

このように，SL は統語的にも意味的にも，単に行為の場所を表す付加詞

PP とは異なることがわかる。

2.1.2.2 P の意味的特性

SL の主要部である P としてどのような語彙項目が実際に生起可能か，ということについてみてみると，(4A)の動詞類の場合は，(18)に示したように，on/in 以外にも場所を表す P が生起可能であることがわかる。[6] この場合の SL は，行為の範囲を限定する機能をもつ。

(18)a. A snake bit him {under/ near/ above} the lip.
b. A snake bit him between the eyes.
c. He scratched himself behind the ear. (Ahlgren 1946: 4)

経路を表す P は，(19a)-(19b)に示したように接触の場所を経路で示す場合は生起可能となるが，NP2 が接触の着点となるような経路を示す場合は不可能となるようだ。

(19)a. He shot himself through the leg. (Krusinga 1931: 45)
b. A snake bit him {along the leg/ around the lips}.
c. *Bill hit Fred {into/ toward} the nose.

すなわち，SLC は，(19a)の「彼の撃った弾丸が彼の足を貫通する」という事態や，(19b)の「蛇が足に沿って何カ所か噛む」または，「唇の周囲を何カ所か噛む」という事態を表すことはできるが，(19c)の「ビルの拳がフレッドの鼻に向かっている」という事態は表すことができないのである。

なお，Massam(1989)は(20)の例を挙げて，P の代わりに where に導かれた関係副詞節も生起できることを指摘している。

(20)a. She hit me where it hurts.
b. Grant hurt him where it counts. (Massam 1989: 239)

(20)の下線部の節をどのように分析するのかにもよるが，(21)の下線部と

関係づけて考えれば，(20)の下線部も場所を表すPを主要部とする前置詞句とみなせるかもしれない。

(21)a. She hit me on the point where it hurts.
b. Grant hurt him on the point where it counts.

(4B)の動詞類の場合は，by以外ではある限られた種類のPが生起し，(4C)の動詞類の場合は，in以外のPは生起できないようである。(7)

(22)a. The dog pulled him {by/ *in/ *on/ *around/ *near/ *...} the coat.
b. Uncle Vernon seized Harry {around/ by/ near} the waist and threw him into the wall. (cf. *HPPS*: 49)
c. He looked me straight {in/ *on/ *by/ *into/ *...} the face.

2.1.3 [NP1-P-NP2]の特性

本節ではSLCのNP1とNP2の間にみられる意味的特性について考察する。

一般に，(23a)，(24a)の下線部で示した[the-N]という内部構造をもつNP(＝the hand, the face)は，先行するNP(＝John)の身体の一部であるという解釈をもちえない。すなわち，(23a)ではthe handが「ジョンの手」ではなく「ジョン以外の人間の手」を，(24a)ではthe faceが「ジョンの顔」ではなく「ジョン以外の人間の顔」を指すという解釈のみが可能となる。「ジョンの手」，または「ジョンの顔」を指したい場合は(23b)，(24b)のように代名詞が生起する必要がある。

(23)a. John raised the hand.
b. John raised his hand. (Urushibara 1989: 71)
(24)a. John put the cream on the face.
b. John put the cream on his face.

一方 SLC の場合は，NP2 の内部構造が[the-N]と[所有格の代名詞-N]のどちらの場合であっても，NP2 は NP1 の身体の一部という解釈となり，NP1 と NP2 の間には全体とその一部という関係が成り立つ。[8] つまり，NP2 の内部構造が(25a)のように[the-N]である場合も，(25b)の[所有格の代名詞-N]の場合と同様に，NP1 と NP2 の間には全体とその一部という関係が成り立ち，the forehead は「ビル以外の人間の額」ではなく，「ビル(=NP1)の額」という解釈になる。[9]

(25)a. Carla kissed Bill on the forehead.
b. Carla kissed Bill on his forehead.

ただし，Quirk *et al.*(1985)や Urushibara(1989)で指摘されているように，NP2 の指示物が身体部分でない場合は，その指示物が身体部分から離れれば離れるほど，SLC の容認度が低くなることが(26)の例からわかる。[10] この傾向は，(4B)の動詞類より(4A)の動詞類の方により強くみられる。

(26)a. *John kissed the Pope on {the ring/ the gown}.
(*cf.* Urushibara 1989: 72)
b. They seized him by {the throat/ the beard/ the collar/ ?the jacket}. (Quirk *et al.* 1985: 272)

このように SLC の場合に限って，[the-N]の内部構造をもつ NP2 が，先行する NP1 の身体の一部であるという解釈が可能になるのだが，SLC の場合であっても(27a)に示したように修飾語句が生起した場合は非文となり，(27b)に示したように必ず代名詞が生起しなければならない。

(27)a. *Carla kissed Bill on the unshaved chin.
b. Carla kissed Bill on his unshaved chin.

2.2 GC との比較

本節では，SLC 全体の特性について，SLC と同じ事態を表す GC が存在するのかどうか，また，存在する場合は対応する GC との間に語用論的側面からみてどのような相違点があるのか，の 2 点に焦点をあてて考察する。

SLC と同じ事態を表す GC が存在するかどうかについてみてみると，(4B)の動詞類の場合はそのような GC は存在せず，(4A)の動詞類の場合は存在する場合と存在しない場合があることがわかる。

まず，(4B)の動詞類の場合，(28)-(31)に示したように SLC と GC は完全に同じ意味を表すとはいえない。

(28)a. They grabbed him by the arm.
　　b. They grabbed his arm. (≠(a)) (Quirk *et al.* 1985: 271)
(29)a. Mary dragged the chair by the legs.
　　b. Mary dragged the chair's leg. (≠(a))
(30)a. The dog pulled Mary by the jacket.
　　b. The dog pulled Mary's jacket. (≠(a))
(31)a. Great-uncle Algie came round for tea and he was hanging me out of an upsatirs window by the ankles .... (*HPPS*: 137)
　　b. ... and he was hanging my ankles out of an upsatirs window .... (≠(a))

(28)-(31)のどの SLC においても，NP1 と NP2 の間には 2.1.3 節でみた全体とその一部の関係が成り立っている。すなわち，(28a)の the arm は「彼の腕」，(29a)の the legs は「椅子についている脚」，(30a)の the jacket は「メアリーが身につけているジャケット」，(31a)の the ankles は「僕の足首」を表している。一方，(b)の GC では，NP1 と NP2 の間に全体とその一部の関係が成り立っていなくてもよい。特に，NP2，または，NP1 と NP2 が無生物である場合は，NP2 が NP1 とは切り離された物体を指し示す傾向が強くなる。すなわち，(28b)の his arm や(31b)の my ankle は(非常に希な事態ではあるが)「彼の体から切り離された腕」や「僕の身体から切り離さ

れた足首」である可能性もあり，(29b)の Mary's jacket はメアリーが身につけている状態とは限らないし，(30b)の the chair's legs も椅子から切り離された場合も表しうる。また，(31b)では，my ankles が「僕の体の一部としての足首」を指し示すとしても，今度は(31a)と意味が異なってくる。すなわち，(31a)では，足首をおじさんが持ち，僕の身体全体は逆さ吊りの状態で窓からぶら下がっているという解釈になるの対し，(31b)では，窓からぶら下がっているのは僕の足首だけでそれ以外の部分は窓の中にある(窓枠に足を掛けているなど)という解釈となる。

次に(4A)の動詞類の場合は，2.1.2.2 節でみた on/in 以外の P を主要部とする PP が生起する SLC には，(32)-(36)に示したように同じ意味内容を表す GC は存在しない。

(32)a. A snake bit him {under/ near/ above} the lip. (=(18a))
b. A snake bit his lip. (≠(a))
(33)a. A snake bit him between the eyes. (=(18b))
b. A snake bit his eyes. (≠(a))
(34)a. He scratched himself behind the ear. (=(18c))
b. He scratched his ear. (≠(a))
(35)a. He shot himself through the leg. (=(19a))
b. He shot his leg. (≠(a))
(36)a. A snake bit him {along the leg/ around the lips}. (=(19b))
b. A snake bit {his leg/ his lips} (≠(a))

例えば，(35b)は必ずしも弾丸が足を貫通している必要はないし，(36b)は「蛇が足／唇を一度だけ噛んだ」という解釈となるのが自然であり，(35a)や(36a)と解釈が完全に同じとはいえない。

したがって，同じ事態を表す GC が存在するのは，(4A)の動詞類が on/in を主要部とする SL と共起する場合のみとなる。しかしながら，この場合も語用論的な要因を考慮に入れると，完全には同じ意味を表すとはいえない。

例えば，Kruisinga(1931: 45-46)や Ishibashi *et al.*(1960: 33)には，GC においては行為者の関心が被行為者の一部にあるのに対し，SLC では被行為

者全体にあるという相違が考えられる，という記述がある。すなわち，(37a)と(37b)は同じ事態を表してはいるが，(37a)では行為者の関心が Bill の一部である Bill's back にあるのに対し，(37b)では被行為者である Bill 全体にある，という相違がありえるということである。

(37)a. Carla hit Bill's back.
b. Carla hit Bill {on/ in} the back.

この相違は，動詞の直接目的語は動詞によって表された行為の影響を受けると解釈されやすい，という原理がはたらくことによって生じたと考えられる。したがって，(37a)では動詞 hit の直接目的語の Bill's back，すなわち「ビルの一部」が，(37b)では Bill，すなわち「ビル全体」が「叩く」という行為の影響を受けると解釈され，これが Kruisinga(1931)らの指摘したような相違につながるのは自然なことといえる。

さらにいろいろな解釈の要因によって，SLC には被行為者に対する親愛感，嫌悪感，注意喚起というような感情的色彩を込めやすく，GC はそのような色彩のないいわば事務的な行為を表わしやすい，という Ishibashi *et al.* (1960)が指摘しているような傾向が出てくる。例えば(38)-(39)の(b)に示した文はいずれも文法的ではあるが，それぞれ以下のような要因によって語用論的には不自然な文となる。

(38)a. The minister kissed the Queen's hand.
b. The minister kissed the Queen on the hand. (Kruisinga 1930: 46)
(39)a. John kissed the top of the table.
b. John kissed the table on the top. (Wierzbicka 1979: 143)

(38)では，女王とその臣下の関係として一般的に考えられている関係を考えあわせると，大臣が女王に対してする接吻は儀礼上のものであるのがふつうで，そのため(38b)の文は不適切になる。(39)では NP1 の指示物が「テーブル」という無生物であるため，文脈の指定がない限りは感情的色彩を込めることはむずかしく，(39b)は不自然になる。[11]

3. 先行研究

ここまでみてきたように，GC は項構造では「物体 X が物体 Y の一部に接触する」という 2 項で表される事態を，統語構造においても主語と目的語の 2 項で実現している。これに対して，SLC は GC と同じ事態を統語構造では主語，目的語，前置詞の目的語の 3 項で実現しており，項構造と統語構造の間にずれが生じている。このずれをどのように説明するかについては，統語的道具建てを使う立場(Guéron(1985)，Baker(1988)，Urushibara (1989)等)と意味的な道具建てを使う立場(Massam(1989)，Pinker(1989)，Jackendoff(1990)，Tomizawa(1992)等)の 2 つの立場がある。本節では，3.1–3.2 節でこの 2 つの立場による分析案を順に概観し，3.3 節で，それぞれの立場が 2 節でみた SLC の諸特性をどのように記述・説明しようと試みているのかを考察する。

3.1 統語的分析

統語的立場による分析案には，項構造と統語構造のずれを要素の繰り上げ(raising)といういわゆる変形規則によって，GC と関係づけて説明しようとする立場(Baker(1988))と，はじめから要素が繰り上がっているような構造を仮定して同一指標によって説明しようとする立場(Guéron(1985)，Urushibara (1989))の 2 つの立場がある。どちらの立場にせよ，これらの統語的分析案が主に説明しようと試みているのは，2.1.3 節でみた NP1 と NP2 の間に全体とその一部の関係が成り立つことについてである。

3.1.1 Baker(1988)

Baker(1988)では，英語における SLC を直接とりあげているわけではないが，Chamorro(グアム，サイパン)，Chichewa(アフリカ東南部マラウイ)，Kinyarwanda(アフリカ中部ルワンダ)といった言語にみられる，項構造と統語構造のずれの問題を N 再分析(Noun Reanalysis)という変形規則によって説明しようと試みている。

例えば，(40)に示した Chichewa の 2 つの文は，「ハイエナがウサギの魚

を食べた」という同じ事態を表しており，意味的には動詞の項は「ハイエナ」と「ウサギの魚」の2項であると考えられる。一方，統語構造においては，この2項を(40a)が主語と直接目的語の2つの要素として実現しているのに対して，(40b)は，(40a)の所有格の名詞 kalulu が独立した目的語として繰り上げられているため，3つの要素として実現している。

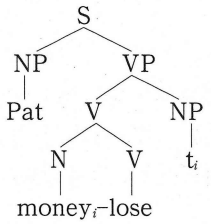
(40)a. *Fisi* *a-na-dy-a* *nsomba z-a* *kalulu.*
hyena SP-PAST-eat-ASP fish AGR-of hare
'The hyena ate the hare's fish.'

b. *Fisi* *a-na-dy-er-a* *kalulu nsomba.*
hyena SP-PAST-eat-ASP hare fish
'The hyena ate the hare's fish.' (Baker 1988: 271)

Baker(1988)は，統語構造が異なっていても意味関係が同じ場合はD構造(D-structure)が同じでなくてはならないという仮定に基づき，(40a)の構造にN再分析という変形規則を適用して(40b)を生成するという分析をしている。

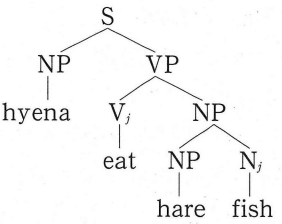
N再分析という統語的操作は，もともとVの直接目的語であったNをVに編入するという語彙的操作のN編入(Noun Incorporation)と平行的な操作で，もともとVの直接目的語であったNPの主要部NとVを1つのVとして再分析し，指定部のNPが再分析されたVの独立の目的語となる，という操作である。N編入とN再分析を図式化すると(41a)，(41b)のようになる。

(41)a. N編入



(Baker 1988: 80)

b. N再分析



(cf. *ibid.*: 276)

(40a)から(40b)を派生することによって，項構造では2項であったものが(40b)の統語構造では3つの要素で実現されるというずれが説明されることになる。GC と SLC の表す意味内容が同じであるとすると，(40)の場合と同様に，GC の NP2 に再分析を適用し所有格の NP1 を目的語として繰り上げ，SLC を生成すると仮定することも可能である。このような仮定に基づき，SLC では項構造では2項であったものが統語構造では3項として実現するというずれと，GC においても SLC においても NP1 と NP2 の間に成り立つ関係が同じであることが説明される可能性がある。

3.1.2 Guéron (1985), Urushibara (1989)

前節でみた Baker(1988)の立場とは異なり，Guéron(1985)，Urushibara(1989)は，GC と SLC とを統語的操作によって関係づけるという立場はとっていない。GC の構造とは無関係に，はじめから SLC の統語構造として Guéron(1985)は(42a)，Urushibara(1989)は(42b)を仮定している。

(42)a. She pulled him_i [by [the hair e_i]] (*cf.* Guéron 1985: 64)

b. John hit Mary_i [$_{PP}$ in [$_{SC}$ PRO_i the stomack]]

(Urushibara 1989: 76)

Guéron(1985)では，NP2 内に空範疇 anaphor(=*e*)が生起すると仮定されている。この anaphor は語彙内容をもつ NP1(=him)に束縛されることにより，NP1 と同一の指標を付与される。これによって NP1 と NP2 の間に全体とその一部という関係が成り立つことが保証される。

Urushibara(1989)では，P の補部は小節(small clause，以下 SC と略す)の内部構造をもち，SC 内の PRO と NP2(=the stomack)には所有者と被所有物の関係(possessor-possessed relation)，すなわち本稿で全体とその一部の関係と呼んでいる関係が成り立っていると仮定されている。SC に生起する空範疇 PRO は，NP1(=Mary)に C 統御(c-command)されるため，NP1 と同一の指標を付与される。この分析案では，NP1 と同一の指標を付与された PRO が介在することによって，NP1 と NP2 の間に全体(所有者)とその一部(被所有物)の関係が成り立つことが保証されていることになる。

このように，Guéron(1985)，Urushibara(1989)ともに，NP2 内に空範疇が生起し，その空範疇が NP1 と同一の指標を付与されるという分析案によって，NP1 と NP2 の間に成り立つ関係を捉えようとしている。

3.2 意味的分析

意味的立場による分析案が主に説明しようと試みているのは，2.1.1 節でみた SLC に生起可能な V の意味類についてである。Massam(1989)，Pinker(1989)，Jackendoff(1990)の 3 つの分析案は，ともに SLC に生起する V の語彙概念構造のレベルで，SL との共起可能性を捉えようと試みている。また，Massam(1989)や Jackedoff(1990)では，NP2 が NP1 の一部であることを意味構造と統語構造の対応規則に書き込んでおくことによって，2.1.3 節でみた NP1 と NP2 の間に成り立つ全体とその一部の関係を捉えようとしている。本節ではこれらの分析案のうち，具体的には Jackendoff(1990)の分析案を概観する。

Jackendoff(1990)の概念意味論(Conceptual Semantics)においては，概念構造と統語構造はそれぞれの生成規則によって独立に生成され，2 つの構造は対応規則によって対応するという文法のモデルが仮定されている。[12] 語彙記載は対応規則の 1 つとして位置づけられており，語彙部門という独立のレベルは仮定されていない。このような仮定に基づく概念意味論では，SLC の概念構造が動詞の語彙概念構造からどのように生成され，それが SLC の統語構造とどのように対応することになるのかについて，以下でみていく。

Jackendoff(1990)では，「接触」を表す動詞の語彙概念構造の関数に＋c という概念素性を指定している。SL を導入する規則として(43)を仮定し，動詞に＋c 素性が指定されている場合に限って，その動詞の項の 1 つである Y とある意味関係が成り立つような制限的修飾部(＝$[_{Place}$ G ([PART OF Y])])を付加することができることを記述している。

(43) $[F_c([_{Thing}\ X], [P([_{Thing}\ Y])])]$

$$\rightarrow \begin{bmatrix} F_c([_{Thing}\ X], [P([_{Thing}\ Y])]) \\ [_{Place}\ G([PART\ OF\ Y])] \end{bmatrix}$$

(Jackendoff 1990: 112)

(43)からわかるように，Jackendoff(1990)はGCとSLCを関係づけるという立場ではなく，「接触」を表す2項述語を含む文とSLCとを(43)によって関係づけるという立場をとっている。例えば，(44a)に示した文の概念構造は，概略(45a)に示したよう仮定される。この概念構造の[BE_c ([MARY], [$_{Place}$ AT_c([JOHN])])]の部分は(43)の規則の適用条件を満たしているので，(43)の適用が可能となる。(43)を適用した結果，制限的修飾部が導入された概念構造は(44b)に示したようになり，主要関数構造の部分([$_{Place}$ ON([BACK])]をのぞいた部分)は項連結(argument linking)によって，制限的修飾部([$_{Place}$ ON([FOREHEAD])])は制限的修飾部規則(restrictive modifier rule)によって，対応する文(43b)との対応関係が決められる。[13], [14]

(44)a. Mary kissed John.
b. Mary kissed John on the forehead.

(45)a. $\begin{bmatrix} [BE_c\ ([MARY], [_{Place}\ AT_c\ ([JOHN])]) \\ AFF\ ([MARY], [\quad]) \end{bmatrix}$

b. $\begin{bmatrix} [BE_c\ ([MARY], [_{Place}\ AT_c\ ([JOHN])]) \\ AFF\ ([MARY], [\quad]) \\ [_{Place}\ ON\ ([FOREHEAD])] \end{bmatrix}$

このように，(43)の規則に動詞の意味的特性を書き込むことによって，SLCに生起可能な動詞の意味類を捉え，また，制限的修飾部と位置づけられたSLの概念構造の中に[PART OF Y]と指定しておくことによって，NP1とNP2の間に全体とその一部という関係が成り立つことを保証している。

3.3 考　察

本節では，2節でみたSLCの諸特性を説明するには，3.1節でみた統語的道具建てを用いる分析よりも，3.2節でみた意味的道具建てを用いる分析の方が記述的に妥当であることをみる。

まず第一に，どの分析案であれ統語的分析を行う場合，どのみち(46)に示したような意味的・語用論的制約をどこかで述べておく必要がでてくる。

(46)a. V は意味的に「接触」を表していなければならない。(cf. 2.1.1 節)

b. SL の主要部として into や toward などの経路を表す P は生起できない。(cf. 2.1.2.2 節)

c. NP2 内に修飾語句が生起してはならない。(cf. 2.1.3 節)

d. (4A)の動詞類の場合，NP2 の指示物は無生物でない方がいい。(cf. 2.2 節)

さらに，GC と SLC とを関係づける統語的分析では，(28)-(36)でみたように同じ事態を表す GC が存在しない SLC の場合，変形規則によって GC から SLC を生成することが不可能となる。その結果，NP1 と NP2 の間に成り立つ全体とその一部の関係を捉えられなくなり，そのような関係を保証する別の規則を(28)-(36)の SLC 専用に規定する必要がでてくる。

第二に，(46)の制約は，統語規則の適用条件として書き込むか，統語規則を適用した結果派生した構造にかかるフィルターのような形で述べておくことは可能かもしれないが，(4B)-(4C)の動詞類や，(8)，(10)に示した文の場合は，もはやこのような制約として述べておくことも不可能となる。SL が生起可能かどうかをみるために，(4B)-(4C)の動詞類の場合は，動詞単独の意味ではなく SL と共起した場合にはじめて「接触」の意味が表されので，SLC 全体の意味を計算しなければならない。また，(8)，(10a)，(10b)の場合は，V′ 全体の意味を，(10c)の場合は付加詞 into motion も含めた VP 全体の意味を計算しなければならないことになる。このように，文の意味を SLC 全体として計算しなくてはならないような場合は，(46)のような制約の形で述べることはできないと思われる。

一方，概念意味論の枠組みでは，(43)の規則を採用するかどうかは別にして，統語構造と概念構造との対応の仕方の制約として，(46)を書き込むことができる。また，(4B)-(4C)の動詞類が SLC に生起する場合や，(8)，(10)の文の場合は，統語構造がどのようなものであれ，SLC 全体の概念構造を計算した結果，「接触」の意味がでるのか，でないのかをみることによって，SLC が適格であるかどうかを決めることができる。統語構造と概念構造の対応の仕方に関する(46)の制約の述べ方，SLC 全体の概念構造の計算の仕方の詳細は今後の課題としたい。

4. ま と め

本稿では，SLC の諸特性を考察し，その諸特性を捉えるためには概念意味論の枠組みが有用であることを示唆した。

《注》

（1） (1b)における所有格 NP1's(＝Bill's)が，(1a)においては直接目的語として独立した NP1(＝Bill)となっていることから「身体部分所有者上昇交替(Body-Part Possessor Ascension Alternation)」という名称で(1a)と(1b)が関係づけられて呼ばれることもある。(Pinker(1989), Levin(1993)等参照)

（2） Levin(1993)は SLC が生起可能な動詞類として(4Aa)，(4Ab)，(4Ad)の 3 つの動詞類を，Jackendoff(1990)は(4Aa)，(4Ab)，(4Ac)と後述の(9)の 4 つの動詞類を挙げている。個々の動詞の例は(4Aa)，(4Ab)，(4Ad)については Levin(1993)に，(4Ac)については Jackendoff(1990)に基づいている。Levin (1993)では，(4Ab)の impact verbs をその統語的ふるまいの違いからさらに (i)hit verbs，(ii)swat verbs，(iii)spank verbs，の 3 つに下位分類し，また，(iv) poke verbs は「先端のとがった物体が別の物体の表面に接触する」という意味を表す別の動詞類に分類している。本論文では(4Ab)の動詞類の「ある物体 X が移動をした結果別の物体 Y に接触する」という基本的意味で記述できる範囲であると考え，同一の動詞類とした。

（3） Levin(1993)では cutting verbs の下位類である carve verbs(bore, bruise, carve, chip, chop, crop, crush, cube, dent, ice, drill, file, fillet, gash, gouge, grate, grind, mangle, mash, mince, mow, nick, notch, perforate, pulverize, punch, prune, shred, slice, slit, spear, squash, squish)は SLC に生起することが不可能であるとしている。Levin(1993)によれば carve verbs は，物体 X と Y の接触と接触の結果の Y の状態の変化を含意するような動詞類である。これらの動詞に関して SLC が不可能である理由は，(10)の非文の場合と同様に，意味の中心が接触よりも接触の結果の Y の状態にあることと関連しているのではないかと思われるが，この理由を明示的に示すことは今後の課題とする。

（4） (9b)に示したように attatchment verbs の文法性の判断はインフォーマントによって異なる。

（5） Langacker はある行為に(他の部分に比べると)直接関わる部分，焦点の当たっている部分を active zone と呼んでいる。

（6） ただし，(i)に示したように in の生起が可能なのは，(4Ab)の impact verbs のみであると Jackendoff(1990)は指摘している。

(ｉ)a. Bill hit Harry {on/ in} the nose.

b. Bill touched Harry {on/ *in} the nose. (Jackendoff 1990: 110)

(7) (i)の下線部で示したように，(4B)に属する動詞 catch は，一見 by 以外の P を主要部とする PP と共起可能であるように見える。

(i)a. When his arm caem up I ducked away but it caught me on the side of the neck, watering my eyes, and I backed off to cough. (K24 21)

b. Before he could snap it on, a stinging blow caught him in the ribs. (L21 165)

c. Curt caught him flush on the nose with a blow which started at the floor. (N12 143)

しかし，この場合の catch は(ii)に示したように hit で置き換えることができるので，この意味での catch は，(4B)の動詞類ではなく(4A)の動詞類に属するといえる。

(ii)a. ... it hit me on the side of the neck, ...

b. ..., a stinging blow hit him in the ribs.

c. Curt hit him flush on the nose ....

(8) (i)に示した文が非文であることからわかるように，動詞 hit の意味特性が[the-N]と先行する NP1 との間の関係を保証しているわけではない。

(i) I hit him [because the hand was in my way]. (Guéron 1985: 63)

(9) SL の NP2 には，定冠詞 the や代名詞の他に(i)の下線部に示したように不定冠詞 (a/an) が生起する場合もまれにある。

(i) He caught her by an arm and helped her into the kitchen.(N01 122)

(10) しかし一方で，Massam(1989)には，NP1 と NP2 の関係は全体とその一部の関係に限らないという指摘がある。そこで挙げられている(i)のような例がなぜ文法的になるのかについては，今後の課題としたい。

(i)a. The bombs hit us on the roof.

b. He hit me on the fender. (Massam 1989: 239)

(11) Wierzbicka(1976)は，NP2 の指示物が人間の身体部分である場合と無生物である場合について，それぞれ(ia)，(iia)に示したような異なった深層構造を仮定し，(ib)と(iib)の文法性の違いはこの深層構造の違いによるものであるという統語的説明をしている。

(i)a. John kissed Mary.

b. John kissed Mary on the cheek.

(ii)a. John kissed the book

b. *John kissed the book on the cover.

(12) Jackendoff(1983, 1990)では，動詞の意味は GO，BE といった原始関数(primitive function)とその変項に展開された 1 つの関数構造として表示される。この表示が概念構造(conceptual structure)とよばれる。

(13) 項連結とは，語彙概念構造の項に A 指定(A-marking)を行うことによって，A 指定を受けた項が統語構造において名詞句や前置詞句と対応することを示す方法である。この方法により対応することになるのは概念構造の主要関数構造(main conceptual structure)の項と統語構造の義務的項である。概念構造

と統語構造の結びつき方には一般性があり，A 指定を受けた項が統語構造のどの位置と結びつくかは語彙項目ごとに指定される必要はない。連結階層(linking hierarchy)に従って主題階層(AFF 関数の第 1 項— AFF 関数の第 2 項— GO 関数の第 1 項…)の高い位置のものを順に統語階層の高い位置のもの(主語—第 1 目的語—第 2 目的語)に対応させていく項連結(argument linking)を行うことにより，統語構造の位置と対応する。例えば，(ia)の文と(ib)の概念構造が対応するためには，動詞 hit の概念構造は概略(ⅱ)のように表示されると考えられる。

(ⅰ)a. Mary kissed John.

b. $\begin{bmatrix} [\mathrm{BE_c}\ ([\mathrm{BILL}], [\mathrm{AT_c}\ ([\mathrm{JOHN}])])] \\ {}_{\mathrm{Event}}\ \mathrm{AFF}\ ([\mathrm{BILL}], [\quad]) \end{bmatrix}$

(ⅱ) $\begin{bmatrix} [\mathrm{BE_c}\ ([\alpha], [\mathrm{AT_c}\ ([\quad]_{\mathrm{A}})])] \\ {}_{\mathrm{Event}}\ \mathrm{AFF}\ ([\quad]^{\alpha}{}_{\mathrm{A}}, [\quad]) \end{bmatrix}$

(ⅱ)の概念構造において A 指定を受けた AFF 関数の第 1 項，第 2 項がそれぞれ主語，目的語に対応する。同一の名詞句が 2 つ以上の主題役割と結びつく場合は，項束縛(argument binding)という表示法を用いることにより統語構造との対応がとらえられる。項束縛では主題階層において高い位置にある項がほかの項を束縛する。(ⅰ)では CS 関数の第 1 項と BE 関数の第 1 項の値はともに α で，上つき文字 α のついている AFF 関数の第 1 項に束縛され，同じ値をとることが示されている。

(14) 制限的修飾部規則とは，統語構造における随意的要素と概念構造における随意的要素の対応関係を決める規則で，具体的には(ⅰ)に示した形式である。

(ⅰ) 制限的修飾部規則 (restrictive modifier rule)

YP が XP において $\mathrm{X'''}$ に直接支配され，かつ，YP の概念構造が $[\mathrm{C_y}]$ であるならば，XP の概念構造は $\begin{bmatrix} \cdots \\ [\mathrm{C_y}] \end{bmatrix}$ となる。

(If YP is daughter of $\mathrm{X'''}$ in XP, and the conceptual structure of YP is $[\mathrm{C_y}]$, then the conceptual structure of XP is of the form $\begin{bmatrix} \cdots \\ [\mathrm{C_y}] \end{bmatrix}$

(Jackendoff 1990: 56))

参考文献

Ahlgren, A. 1946. *On the use of the definite article with 'nouns of possession' in English.* Appelbergs Boktryckeriaktiebolag: Uppsala.

Baker, M. C. 1988. *Incorporation: A theory of grammatical function changing.* Chicago: The University of Chicago Press.

Fillmore, C. L. 1967. The grammar of *hitting* and *breaking.* In Jacobs, R. A. and P. S. Rosenbaum(eds.) 1970, *Readings in English transformational grammar* 120–133. Waltham, MA: Ginn.

Guéron, J. 1985. Inalienable possession, PRO-inclusion and lexical chains. In Gueron, J, H.-G Obenauer, and J-Y. Pollock(eds.) *Grammatical Representa-*

tions, 43–86. Dordrecht: Foris.
Ishibashi, K, *et al.* (eds.) 1960. *Question-box series 5: Verb, auxiliary verb.* Tokyo: Taishukan.
Jackendoff, R. 1984. *Semantics and cognition.* Cambridge, MA: MIT Press.
———. 1990. *Semantic structures.* Cambridge, MA: MIT Press.
Krusinga, E. 1931. *A handbook of present-day English.* Groningen.
Langacker, R. 1984. Active zones. *BLS* 10, 172–188.
Levin, B. 1993. *English verb clauses and alternation.* Chicago: The University of Chicago Press.
Massam, D. 1989. Part/whole constructions in English. *WCCFL* 8, 236–246.
Pinker, S. 1989. *Learnability and cognition: the acquisition of argument structure.* Cambridge, MA: MIT Press.
Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik. 1985. *A comprehensive grammar of the English language.* London: Longman.
Tomizawa, N. 1992. Secondary locatives and their representations at conceptual structure. *Explorations in English Linguistics* 8, 73–93.
Urushibara, S. 1989. Inalienable possession and PRO. *Sophia Linguistica* 25, 71–82.
Wierzbicka, A. 1976. Mind and body. In J. D. MacCawley, *Syntax and semantics 7: Notes from the underground,* 129–157. New York: Academic Press.
———. 1979. Ethno-syntax and philosophy of grammar. In A. Wierzbicka, 1988, *The semantics of grammar,* 169–236. Amsterdam: Benjamins.

出　典

The Brown corpus and the Lancaster-Oslo-Bergen corpus on the ICAME CD-ROM. 1991. Bergen, Norway: Norwegian Computing Centre for the Humanities.
HPPS: Rowling, J. K. 1997. *Harry Potter and the philosopher's stone.* London: Bloomsbury.